

プラハ日本人学校における国際理解教育

—— 交流学習等から見えてくるもの ——

前在チェコ日本国大使館付属プラハ日本人学校 教諭
富山県魚津市立西部中学校 教諭 川 端 満

キーワード：在外教育施設、プラハ、国際理解教育、交流学習

1. はじめに

チェコに住むようになって、まずこの国の人々の、のんびりとした暮らしぶりに気が付いた。例えば、歩道を歩いている人は、横断歩道をゆっくり渡っている。あわてなくても、大概の車はその手前で必ず止まってくれる。そして、見知らぬ人にも気楽に声をかけてくれる。子どもや犬を大切に、過保護なまでによく面倒を見ている。その子どもたちは誰にも屈託の無い笑顔を見せて、みんなの心を癒してくれる。

日本こそが豊かで幸せな国と信じて疑わなかった自分には、これまでの自分の考えの修正が必要になった。この国にはこの国の豊かさがある。すべての社会制度や歴史的背景を分析することが必要かもしれないが、とりあえず教育の側面から、この国の人々が目指しているものや構築してきたものを考えたい。そして、一人の教育者としてここでの指導や日本での活動に反映させたいと考えるようになった。

2. ストドゥルキ・ギムナジウムとの学校間交流から

本校が継続的に交流している学校の1つにストドゥルキ・ギムナジウムがある

4月にある創校記念日に来校してもらい、餅つきに参加してもらう交流が続いている。つくたてのお餅を食べながら、互いの趣味や学校での様子を話し合う。本校生徒がストドゥルキ・ギムナジウムを訪問した際には、互いの生徒が混ざり合ったグループをいくつか作り、グループ対抗のクイズ大会を実施してもらった。チェコの子どもにはよく分かるが、日本の子どもにはよく分からない問題も多かったが、そこは子ども同士ならではコミュニケーションで和気藹々と話し合っていた。



ストドゥルキ校の教室にて

この学校とは生徒同士の交流だけではなく、教師交換事業が継続的に行われている。この授業ではストドゥルキ校の教師によりチェコの歴史と伝統文化の授業、地理の授業が行われる。本校の生徒は英語とチェコ語に苦戦しながらも、この国への理解を深められたと思う。相手校へは2回訪問し、2時限ずつ計4時限分の授業を行った。内容は相手校の希望もあり「日本語指導」に絞ることにした。

授業には日本語に興味のある生徒やこれまでに日本語指導を受けた経験のある生徒が参加した。しかし、4時限の授業では単語をいくつか覚えることと、簡単なあいさつが言えるようになることで精一杯であった。日本語に興味があるといても、漫画やファッションへの興味が第一であって、日本語による会話や表現を身に付けたわけではなさそうであった。日本への興味が多少なりともある生徒に、言語の学習として少しでも充実させるために継続的な研究をすることが必要である。

生徒たちはリラックスしながら授業に臨んでいたが、無節操なわけでもない。授業の前後には日本の学校のように起立して、あいさつの言葉をかける（礼はしない）。椅子に座る姿勢はやや崩れているが、話はきちんと聞いている。ほとんど目をそらすことが無いように感じられた。単発的な授業ではあったが、体系的なカリキュラムがあればより大きな成果が期待できたと思え、今後の課題といえるだろう。アンケートでは、日本語を学ぶことを前向きに捉えている意見が多いが、よく分からないなどの理由で積極的になれないという意見も見られた。

3. サーザフスカ・ギムナジウムとの交流学習において

〈1年目〉

サーザフスカ・ギムナジウムとの1年目の交流では、互いに声を掛け合うことをテーマとして、本校に迎えた。まず、アイスブレイキングとして誕生日ごとに並んで大きな輪をひとつ作るアクティビティーをした。誕生日と日付を英語、チェコ語、日本語を交えながら何とか大きな輪を作ることができた。その後の答えあわせで彼らのコミュニケーションが決して正確ではなかったことが判明したが、そのことが程よく緊張感をほぐしてくれた。その後は3つのグループに別れ、「昔話の読み聞かせ」「習字」「太鼓の演奏」にて声を掛け合いながら交流を深めることができた。



サーザフスカ校の教室にて

本校生徒が訪問した際にはチェコの伝統舞踊と伝統料理を体験させてもらった。どちらもサーザフスカ・ギムナジウムの生徒に手取り足取り教えてもらいながら、慣れない手つきで取り組んでいた。また、こちらでもクイズ形式でチェコ共和国の概要や風習を学ぶことができた。さらにこちらでは、「早押し」で答えたり、個人の得点が集計されたりとテレビのクイズ番組のような設備もあった。

前述のように生徒たちは3つの言語で交流していたが、少しでも相手との分かり合える部分を探りながらの会話は語彙力と共に交渉力を高めることに繋がった。ヨーロッパでは数ヶ国語を話すことが当たり前ではあるが、子どもの頃からこのような体験を積み重ねているのだろうと考えられる。日本のようにひとつの言語しか意識しない生活はありえないと思われる。

教育機器に関しては、ストドゥルキ校でもそうであったが、現地ではプロジェクターによる授業が普及しているようである。他の学校の観察からも同様な声が聞かれた。日本のように黒板にチョークで書くことは無い。特にサーザフスカ・ギムナジウムではタブレット端末の使用がすすんでいるようで、本校の生徒が訪問した際も1人1台手渡され、クイズに答えていた。もちろん普通の授業では教師の質問に答えることが可能で、その結果を集積することもできる。在チェコ日本国大使館の調査によると、チェコ国内にはICTに力を入れている学校が多く、電子黒板やタブレット端末を積極的に導入している学校も多いようである。中にはビル・ゲイツも視察に来た学校があるとのことである。

〈2年目〉

近隣の現地校との交流学習は以前より続けられていたが、これまでは一緒にお餅を搗いたり、和太鼓をたたいたり、書道をしたりと日本の文化を紹介しながら、ともに触れ合う機会を作ることが中心であった。「互いに話す」ことがあったとしても、簡単な自己紹介に留まり、それ以上のコミュニケーションへと発展することはなかった。やはり言葉の壁があり、互いの心の中（考えていることや思っていること）を伝え合うことには二の足を踏んでしまうことが続いていたようである。

交流学習も同校と2年目、3年目となると、互いにより深く理解しあえるものを目指した。そこで今回は、普通の授業に近い形で「互いの意見を伝え合う」ことをテーマとした。考えられる言語は日本語、チェコ語、英語とあるが、その中から最も意思の疎通ができそうな英語を用い、教師などが翻訳することを極力避けながら学習を進めることを目指した。実際の授業では理科と社会の2つのグループに分けられているが、ここでは自分が担当した社会の授業の経過について報告する。

日本人である本校の児童生徒がチェコに住みながら、この国をどう思っているのかを知る機会は少なくない。しかし、そこでの思いはあくまで日本人としての発想であって、チェコに生まれ育った子どもたちの考えとは、相容れないものがあるかもしれない。そこで、チェコの子どもたちがチェコのことをどう見ているのかを、交流学習という機会で見ることができると考えた。また、チェコの子どもたちが日本のことをどう見ているのか。それに対して、日本人が日本のことをどう見ているのかを検証する必要があると考え、4つのパターンで意

見をまとめ、互いに比較する授業を用意した。

今回の授業は「ジョハリの窓」に着想を得ている。これは心理学の研究でよく用いられている自己分析方法である。「ジョハリの窓」においては「自分から見る自分」、「他人から見る自分」をそれぞれ「分かる部分」と「分からない部分」に分け、合計4つの窓から自己を分析するが、これを参考に①日本人が見る日本、②チェコ人が見る日本、③チェコ人が見るチェコ、④日本人が見るチェコを考えてもらった。

まず子どもたちがよく取り上げるのが食べ物やビールなど食文化に関するものであった。③では、まずビールが話題になる。チェコはビールの1人当たりの消費量が世界一の国である。彼らは未成年であるが、ビールに対する思い入れは強いようである。また、日本の食文化に対する興味も強く、②からはすしやラーメンなどもよく認知されていることが伺える。また、桜がきれいなことなど日本の子どもたちが思っている以上に日本のことをよく知っていることに驚かされる。本校の子どもたちはチェコに住んでいるからこそ、チェコのことも日本のことも分かるだろう。しかし、チェコの子どもたちにとって日本は世界の国の1つにすぎないかもしれないが、それにしても日本の知識が豊富だと思える。アニメや漫画を通しての知識も多いようであるが、「ジョハリの窓」でいう”blind-self”を知ることができた。チェコの子どもたちにとっては、④で日本の子どもたちが指摘した公共交通機関が発達していること（プラハにおいて）や税金（付加価値税≒消費税）が高いことはやや意外であったようだ。

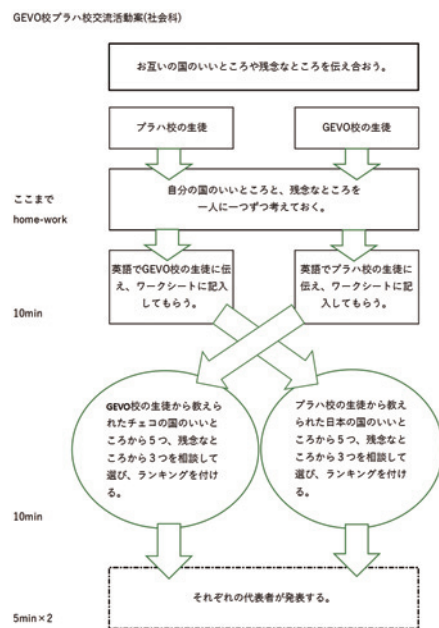
〈3年目〉

サーザフスカ校との3年目の交流学习では、自分の国への考えを問うことはやめて、相手の国（日本人にとってチェコ、チェコ人にとっての日本）をどう見ているかに焦点を当てて取り組ませることとした。また、今回は「いいところ（dobry）」ばかりではなく、「残念なところ（skoda）」についても話し合ってもらった。自分の国の残念なところは言いにくいかもしれないが、互いに2回目の交流で顔見知りになっている生徒も多いようなので、思い切って考えさせてみた。学習の流れは以下のとおりである。

この学習では、社会科の授業の一環として取り組んでいるというものの、前述のとおり学習として成り立つか否かは互いの英語力にかかっている。サーザフスカ校の生徒たちの英語力は、日常会話には問題がなさそうであるが、自分の意見を日本人に解説するとなるとやや手こずるようであった。本校の生徒には、英語力のかなり低い生徒も含まれているが、事前に学習課題を伝えてあったために前もって準備することができ、何とか言いたいことは伝えられたようである。生徒の感想にもあるように「コミュニケーション能力が少しついた」となれば、社会と併せて、英語の学習としても有意義なものであったといえよう。

互いに意見交換した後は、本校の生徒とサーザフスカ校の生徒に分かれ、相手から指摘された意見から共感できるもの順にランキングを付けた。そして、代表者の発表をもってフィードバックすることで、互いに共感できるものは何かを確かめ合うことができた。

日本人には同じ考えを持つことを良しとする国民性があるのだろうか。生徒の感想からは、自分との違う感覚や同じことを逆方向からとらえる考え方に驚いていることが分かる。欧米人と東洋人の違いかもしれないが、私たちにはその傾向（協調性を大切にすることはあるといえるのだろう。やはり、共感できる意見には安心感もあるだろうが、自分とは異なる意見に触れて、自分の考えがステレオタイプなのかもしれないと疑ってみるのときとして必要であろう。共感できる意見に触れることももちろん大切であるし、自分の想定外の意見に触れることも大変重要であると感じた。



3年目における交流学习の流れ

チェコの子どもたちが自国の政治（家）に対する話題を取り上げていることも、本校の生徒には驚きであった。日本の学校教育では政治に関する話題は禁忌のように扱われてきた。特に、現政権や現在活動している政治家を批判することはまず無いといってよいだろう。近年、投票年齢の低下に伴って政治教育の見直しも取り上げられている。学校教育の中で政治やその思想をどう教えるかは今後も議論が続くと思うが、欧米では積極的に学習課題にしているところがあると聞く。少なくともチェコではごく普通の話題ではあるのだろう。本校の生徒はチェコの生徒が政治に関する話題が多いことと、それを熱く語りかけられることに驚き、感想にまとめていることが多い。日本の中学生が学校でそのように話し合うことはまずないであろう。ましてや交流学習である。外国人に自国の政府批判をぶつけることは、これまでの自分の経験では考えられなかった。なお、学校のあるプラハ市では現在の大統領に反対している政党を支持している人が圧倒的に多いという背景がある。チェコでは最近、都市部対その他の地域という対立構造が続いていると伺っている。また、歴史的にもオーストリア＝ハンガリー帝国を動かすハプスブルグ家、ナチスドイツ、ソ連共産党に支配されてきた経緯がある。それは300年から400年に亘る長き時代であり、自分たちの祖先の毎日でもあった。この国の人々の政治体制や権力者への考え方・感じ方は、日本人には分かり難いものがあるだろう。ただ、その違いは肌で感じる事ができたと思う。

4. おわりに

小さな国々がひしめき合うヨーロッパでは、他国を意識しないで生活することは不可能である。自動車や鉄道で数時間走れば隣国やさらにその向こうの国へたどり着いてしまう。また、お隣さんが外国人であることも決して珍しくなく、いろいろな国籍の人や言語と接しながら毎日の生活がある。このような状況では、国際理解教育という言葉も無ければ概念も無いのかもしれない。自分の国はあるけれども、それは決して自分たちだけのものではないし、自分の国の人間で他国において生活している人もたくさん知っている。歴史的にも互いの国々が複雑に絡み合う中で、「自分と違う文化や価値観も尊重する姿勢」が自然に身についてきたと考えられる。その理由はいろいろあるのだろうけれども、ヨーロッパの歴史には「自分と違う文化や価値観も尊重する姿勢」の対極にある「武器を持って戦う」ことを繰り返してきたという負の遺産もある。そのような歴史的背景が、教育に大きな影響を与えていると考えられる。